特集　子どもと土

砂場の魅力

箕輪潤子

誰にでも、砂場で夢中になって遊んだ経験はあるのではないでしょうか。今でも幼稚園や保育所、公園などの砂場では、子どもたちが夢中になって遊んでいる姿を見ることができますし、その様子は大人の心をも惹きつけます。私も保育所で子どもたちが砂遊びをする姿を見ているうちに、そのおもしろさのとりこになりました。そして「なぜ砂場は、子どもたちにとって魅力的な遊び場なのだろう」と不思議に思い、これまで何度も幼稚園や保育所の砂場に足を運び、子どもたちの砂遊びを見てきました。今回はその経験から、砂遊びをする子どもたちの様子を振り返り、その魅力について考えてみたいと思います。

砂の性質がもつ魅力

「砂」という素材がもつ性質は、砂遊びの最も大きな魅力を生み出しています。砂の性質には、力のかけ方によってその形を自由に変えたり、混ざる水分

の量によって色や固まり方を変えたりする可変性があります。また、手を加えることによってできる形が保たれる可塑性があります。手を加えることによって形を作っていくことができる砂は、子どもの中にあるイメージを自由に表現でき、とても魅力的な素材だといえるでしょう。

しかし砂で遊ぶ楽しさは、子どもが一方的に形を作っていくことにのみあるのではありません。砂は時に崩れてしまうなど予想できない動きをします。また、砂を積み上げたり掘り進めたりして形ができていくうちに、できてきた物から新たな物を作ることや見立てを思いついたりすることもあります。つまり、必然や偶然によって変化する砂が、子どもに影響を与えることによって、遊びが展開していくのです。ここにも砂遊びの楽しさがあるのでしょう。砂遊びをする子どもの姿を見ていると、まるで子どもと砂とが対話をしているかのように見えます。

ただし、砂との対話は視覚によるものだけで成立しているのではありません。砂に触れたときの心地よい感触があって初めて、砂に触れ、手を加えるようになっていきます。そして、形を作ることができるようになった後も、子どもたちは形を作りながら砂の感触を楽しんでいます。つまり、砂との対話は視覚と触覚の両方から成り立っているのです。

砂とのかかわりの発達

砂場に行けば子どもたちは好きなように遊べるように思えますが、実は意外にも、砂遊びには経験と技術が必要なのです。以前、幼稚園での三歳児、四歳児、五歳児の砂場での山作り遊びを比較したところ、おもしろいことがわかりました。

三歳児は山を作るときに、積み上げる動作が多く固める動作をあまりしないので、なかなか大きな山ができないのです。ほかの子どもの様子を見たり、

保育者の援助に支えられたりしながら、少しずつ積み上げる動作と固める動作をバランスよく行えるようになっていきます。そして四歳児になると、より大きな山を作るために、仲間と協力するようになっていました。大きな山を作りたいという目的を共有し、一緒に砂を積み上げたり固めたりしていました。さらに、山ができあがると、相談しあってトンネルを掘って遊ぶ姿も見られました。そのような遊びを繰り返していく中で、効率よく山を作っていくための役割分担や道具の使い分けもできるようになっていくのです。そして五歳児になると、砂を固める役割をしていた子どもが遊びから抜けると、後から入ってきたほかの子どもが進んで固める役割を引き受けるなど、役割分担が状況に応じて柔軟にできるようになってきます。さらに、山に載せる砂を掘るときに、ただ掘るのではなく、海や川を作ることを意識して掘る子どもが出てきたりするなど、より遊びが複雑になっていました。

　このように、最初からイメージどおりに砂を形作ったり、遊びを展開できるのではなく、砂とかかわる経験を重ねる中で、ほかの子どもとやりとりしたり、保育者に支えられたりしながら、砂の性質や扱い方を知り、複雑でより楽しい砂遊びを展開できるようになっていくのです。

コミュニケーションと砂

　言葉を話さない砂との対話を行いながらの遊びは一緒に遊ぶほかの子どもとのやりとりにも影響を与えます。ストーリーを展開させていくうえで言葉が大切なコミュニケーションの手段となるごっこ遊び

に比べると、砂遊びにおいてはあまり多くの会話が交わされることはないようです。その代わり、砂が他児とのコミュニケーションを行う際の、大切な媒介となっています。

保育園で砂遊びを観察していたときに、おもしろいことが起きていましたので、紹介したいと思います。砂場の右側では、四歳児と五歳児の男の子が山や道を作って遊んでいました。一方、砂場の左側では四歳児の男の子数名が道を作り、車のおもちゃを走らせて遊んでいました。同じ砂場で行われている遊びでしたが、普段はほとんどかかわりのない子どもたち同士でしたし、別々に始まって、しばらくはそれぞれに遊びを展開していました。しかし、山や道を作っていた四歳児の男の子が、道を作り上げると車のおもちゃを持ってきて走らせ始めました。そして、その子は少しずつ砂場の左側に向かって車を走らせながら道を延ばしていき、砂場の左側で遊んでいた子どもたちが作った道とつなげて、そこに車を進めていったのです。すると、左側で道を作っていた子どもたちの一人が、今度は道を伝って山のほうへ向かっていったのでした。

この出来事が起きているとき、道をつなげた子どもと砂場の左側で道を作っていた子どのたちとの間に、会話は一言も交わされていませんでした。たぶん、ほかの遊びであれば、他児の遊びに加わる際には、何かしらの会話が交わされているのではないかと思います。しかし砂遊びにおいては、砂にかかわる子どもの動きや、手を加えることによって変化する動きを通して、相手が何をしているのか、何をしようとしているのかを知ることができるのです。なお、この遊びをきっかけに、その後の別の遊びにおいても一緒に遊ぶ姿が少しずつ見られるようになっていきました。

そして会話も、ごっこ遊びでは遊びの内容に関係

のある会話がほとんどですが、砂遊びでは「昨日の晩ごはんにハンバーグを食べたよ」といった遊びとは直接関係ないような会話も多く聞かれます。遊びの展開については、砂を介して会話ができるからでしょう。その点で砂場は、子どもたちの社交場のような役割を果たしているのかもしれません。ただしもちろん、遊びの展開が大きく変わろうとしているときや、自分が意図することと違うことをしていると感じとったとき、見立てを共有しようとするときなどは、ちゃんと遊びについての会話が交わされています。

砂場と子ども

砂場は、園庭の隅にあることが多いのですが、木やレンガなどで作られた枠の中は、枠の外とは少し異なる雰囲気をもっています。園庭で行われる多くの遊びが、鬼ごっこやドッジボールなどダイナミックな動きを伴う遊びであるのに対し、砂場での遊びはかがんで行うことが多く、静かにゆっくりとした遊びであることも少なくありません。砂という素材や仲間とじっくりかかわることによって、生まれる空気まで変わってしまうのでしょう。

ここまでで、砂場で遊ぶ子どもたちの様子について筆者の経験から述べてきたように、子どもたちは砂場において、砂と対話し、砂を通して仲間と対話し、さらに自分とも対話をしています。そこには、一方的ではなく、かつ多様で複雑なやりとりが、会話だけでなく、会話以外の見えないところにも多く存在しています。そして、そのやりとりの中で、子どもたちは身体を通じて多くの経験をし、感じ、考えているのだと思います。さまざまな対象とのさまざまな対話ができること、そこに砂場での遊びの魅力があるのではないでしょうか。

（川村学園女子大学　教育学部　幼児教育学科講師）